

森林生かし地域再生

林業家養成へ伐採講習

気仙沼市 雇用、エネルギー活用探る

気仙沼市内で林業家を養成する取り組みが始まった。豊富な森林資源を生かし、再生可能エネルギーへの活用を探ろうというもので、主婦ら市民が2日間にわたってチェーンソーの操作方法、伐採の実技に取り組んだ。

主婦らが取り組む



チェーンソーの技術を習得する参加者

市内の森林面積は約2万3000畧と市全体の約7割を占める。その一方で間伐期を迎えながら、手入れが行き届かない山林も多い。

このため、民間会社気仙沼地域エネルギー開発(高橋正樹社長)「魚町」が、国の「緑の分権改革」調査事業の委託を受けて、森の環境保全や森林資源を生かした、地域内でのエネルギー自給などの可能性を探っている。「気仙沼森のアカデミー」としてプロジェクトを展開しており、

林業家養成もその一環。森林を守り育てながら副業型の林業家を育て、増やそうという取り組みだ。

27、28日の両日は、チェーンソー講習会(取扱技能特別教育)が、廿一地区の農業振谷博之さん所有の山林0.5畧で行われた。主婦を含む23人が参加し、自分で伐採する林業家を育成するNPO土佐の森・救援隊(高知県)のメンバーから座学や実技を学んだ。実技ではチェーンソーの基本的な操作や安全確認、スギを使った輪切り、伐倒体験を行った。

初めてチェーンソーに触れたという、市内田中前の主婦佐藤春佳さん(26)は「木を切る感触が楽しく、とても勉強になった。今後就農での起業を考えているので、技術を習得して木製品づくりなどに挑戦したい」と意気込む。

先月8日には市民を対象にしたフォーラムを開き、間伐で出る「林地残材」を使ったエネルギー材(まさき)、パルプ原料用材への活用などについて理解を深めた。

同社は9月に伐採木の搬出作業、10月には作業道づくり、11月には2回目のチェーンソー講習会を開催。伐採木による木質バイオマスなどへの活用も検討する。

支援する同救援隊の中嶋健造事務局長は「気仙沼は山林が住宅地に近く、傾斜も緩いので林業に適している。来年度中に30人ほどの林業家を育成したい」と話している。